

〈黄帝と老子〉雑観 第5回

## 勃興する戦国黄老思想

### 『黄帝内经』への遙かな道

『黄帝内经』 研究家 松田博公

ツイート 0

- 第1回 [黄帝は誰のことかと黄帝は言い 『黄帝内经』は天人合一の医書である](#)
- 第2回 [『黄帝内经』は養生の書にあらず](#)
- 第3回 [『黄帝内经』はタオの医学書なのか？ 『老子』『荘子』そして『荀子』](#)
- 第4回 [『黄帝内经』に近いのは『老子』か『荘子』か 重層的な無の宇宙論と遍満する気の宇宙論](#)

前回は、『老子』のタオ（道）の思想が、万物が溢れる有の世界の根底に無の世界を設定した重層的宇宙論であるのに対し、『荘子』のタオは、天地宇宙のあらゆる存在が気で満たされている全一的な気の宇宙論であることを述べた。『黄帝内经』の思想は、上下に循環する気の運動を骨子とする天人合一観に貫かれているが、それは『老子』より『荘子』に近いと言いたかったのである。

ところで、『荘子』は、一人の作者が特定の時代に書き下したのではなく、戦国から漢初に至る数百年の間に書き継がれたのである。『黄帝内经』と同じ、天地を循環する気の一元構造の論理は、荘周その人の思想を反映するとされる『荘子』内篇より、その後学の著述とされる外篇・雑篇の「在宥」「天地」「天道」「天運」「刻意」「達生」「山木」「知北遊」「庚桑楚」などの篇に顕著である。加えて、この後期『荘子』の相貌は、初期『荘子』とはまったく異なる。儒家の孔子、顔回師弟が珍妙な問答を繰り広げ、黄帝が登場するなど、他学派との融合を図る姿勢が明瞭なのである。帝王が政治を行う際の心得を述べた天道篇から、分かりやすい一例を挙げてみよう。

「昔の大道の何たるかを知っていた帝王は、まず天の理法、すなわち無為自然の道の運動法則を明らかにし、ついでこの道に基づく虚静恬淡の徳を明らかにした。虚静恬淡の徳が明らかになると、次に仁義を明らかに



今週号のPRの部屋はこちら

- 変形徒手矯正術セミナー (2014/7/6)
- ダイエット・アロママッサージセミナー (2014/8/24)
- ヒューマンワールドのセミナー
- クリニカルストレッチセミナー (2014/10/5)
- あはき師のための在宅ケア実践セミナー (2014/9/14,15)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

#### ■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

し、仁義が明らかになると職分の遵守を明らかにした。職分の遵守が明らかになると次に「形名」すなわち、発言と実際の成果の一致を明らかにし、「形名」が明らかになると次に「因任」すなわち、能力による任用を明らかにした。「因任」が明らかになると次に「原省」すなわち実状の査察を明らかにし、「原省」が明らかになると次に「是非」の価値判断を明らかにした。「是非」が明らかになると次に賞罰の適用を明らかにし、賞罰の適用が明らかになると愚者、知者それぞれに適所を得、貴者、賤者それぞれに地位が与えられ、仁者、賢者、そうでない者がそれぞれあるがままに役割を担い、その能力の分限を守り、必ず自己の発言に基づいて行動するようになった。このように本末先後の序列を持つ大道に従って臣下は君主につかえ、君主は臣下を養い、民を治め、身を修めれば、知謀を用いずとも天下は必ず無為自然の道に帰一する。これを太平と呼び、至高の政治なのである」(注1)

ここでは、天地の一気に遊ぶ現世を超越した初期『莊子』からすれば、トンデモなく世俗的な帝王統治学が展開されている。それだけでなく、純粹老莊思想にはなかった、儒家、法家、墨家など他学派を肯定し、自学派に統合しようとする構えが見られる。この帝王学で、まず体得すべきは天地宇宙の理法である。それはこの引用では明確ではないが、前回の『莊子』の引用を参照していただければ分かるように、政治、人事など一切の基準となる上下に循環する恒常的で無為自然の気の運動法則であり、それは、いわゆる道家思想である(注2)。次に体得すべきなのが、「仁義」、「形(刑)名」、「賞罰」、「才能ある賢者を尊ぶこと」などだが、それぞれ儒家、法家、墨家の思想に該当する。さらに、見逃せないのは、帝王が「身を修めること(=治身)」が国を治めること(=治国)の中心軸だとする天人合一の身体国家観がうかがえることである。

#### ◇後期『莊子』が示す黄老思想の5要素

この後期『莊子』思想のパターンは次の要素にまとめることができる。

- (1) 政治に濃厚な関心がある。
- (2) 「天道思想」を基礎とする。すなわち、天地宇宙の理法(上下に循環する気の運動、四季の変遷など)を捉え、それに準拠して政治を行い人倫を調える。
- (3) 君主は天に倣って無為を旨とし、臣下は有為を旨とする役割分業がある。
- (4) 君主の治身が治国の要だとする治身治国論がある。
- (5) 道家思想を中心に、儒・墨・法など諸家を採り入れる複合思想である。

後期『莊子』が書かれた戦国末～漢初に、このような複合思想はほかにあったのだろうか。いや、ほかにあったところではない。『管子』『呂氏春秋』『淮南子』など当時、書かれた大部の伝世文献、そして1970年代以

★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)

降、漢初までの墓所から発掘された文献のほとんどすべてが、この類型に属するか、この類型を前提に解釈できるものなのである。

学者たちは、現在、こうした戦国末以降、思想界をリードした書物、文献を「黄老書」「黄老文献」と呼び、その思想を「黄老思想」と定義している。それが、黄老思想と名づけられるのは、上記の5つの要素のうち、(1) (2)は「黄帝」思想と、そして(3) (4)は広い意味の「老子」思想と結びつくからであり、漢初政治の主流を担ったとされる「黄老術」の伝説に合致しているからである。

時代は戦国末期、中原を平定するのは齊か、秦か。統一帝国の成立を目前に、諸子百家競合の思想界も、統合に向かって慌ただしさを増した。

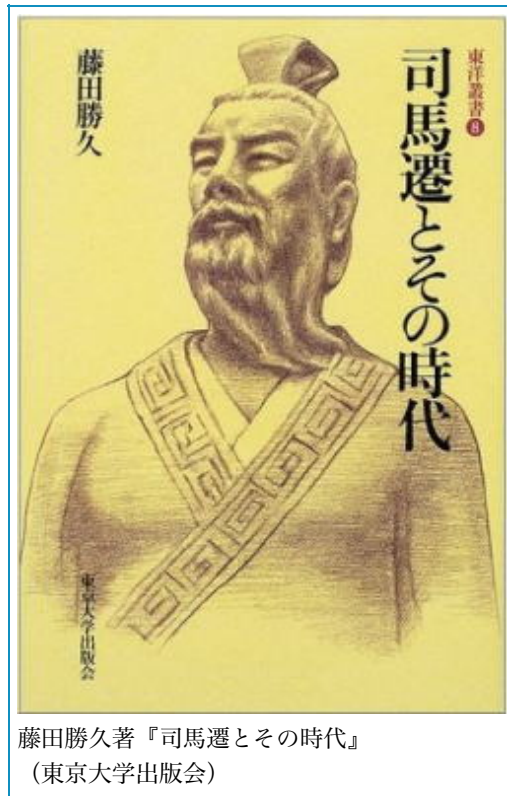
その揺籃の中から、一大思潮として黄老思想が勃興したのである。こうして、あらゆる思想が黄老思想の影響を受けた。後期『莊子』学派は黄老化し、恐らく『老子』学派も、この時代に原『老子』を黄老化させ、政治色を強めた。儒家の荀子も、道家を中核とする黄老思想の向こうを張って、儒家の複合思想を立てようとした気配がある。(その遺志は、100年ののち、漢・武帝の時代に董仲舒によって実現される。)

黄老思想の養生論については、今後、議論するが、ここで、あらかじめ述べておけば、「恬淡無為」を看板にしつつ、心身を積極的に修養するものである。ところで、第3回で検討した熊野弘子論文「『黄帝内経』における養生と氣」(関西大学中国文学会紀要第30号)が指摘したように、初期『莊子』『老子』が究極的に求めたのは、スピリチュアルで現世超越的な宇宙論的心身の境地であった。しかし、その『莊子』『老子』が黄老化すれば、目標は「治身治国」の論理に従って、形(肉体)と神の健全さの追求へと変容するのである。

だから、後期『莊子』には次のような、初期『莊子』とは異質な肉体の長生を肯定する文章が混じる。

「なんじの形を勞することなく、なんじの精を揺かすことなくば、乃ち以て長生すべし。目は見る所なく、耳は聞く所なく、心は知る所なくば、なんじの神は將に形を守らんとし、形は乃ち長生せん」(在宥篇)

『老子』に、「其の兌(あな)を塞(ふさ)ぎ、其の門(兌・門=目、



耳、鼻、口などの感覚器官)を閉ずれば、終身つかれず」(第52章)と養生術と解釈できる文章があるのも、今は詳しく吟味する余裕はないが、『老子』がある段階で黄老化し、その際に取り込まれた文章だからであろう。

わたしが、熊野論文に対して、「こうした老荘思想の変容の背景に、どんな時代思潮が流れ、それは『黄帝内経』の成立とどう関係するのか。それに答えるためには、戦国から漢代を席卷した、横断的で統合的な思想のミッシングリンクを見つけなければならない」と食い下がったのは、こういう訳があったのである。

さて、さまざまなことを知ると、われわれも穏やかではいられない。『黄帝内経』もまた、この黄老思想の5要素を満たすのである。

いうまでもないが、『黄帝内経』は医書であり、政治書ではない。しかし、黄帝は日夜、民の健康を気遣い、どうすれば民が寿命をまっとうできるかに頭を悩ませ、臣下の名医と問答を続けている。それは広義の政治である。そう考えれば(1)はクリアしている。また、『黄帝内経』全162篇を貫く中核の思想は、天地日月の法則に基づいて治療を施すべしとする「天道思想」にほかならない。(2)もまたクリアしている。

(3)については検討するまでもないだろう。『黄帝内経』は、天地とともに生き心身を陶冶せよと指示するが、何よりも恬淡虚無の道家的境地を重視する。(4)の「治身治国」の論理は、『靈枢』師伝篇、外揣(がいすい)篇で述べられている。『素問』靈蘭秘典論篇が藏府を国家制度に比定しているのも同様である。また(5)は、『黄帝内経』が、道家、儒家、墨家、法家、陰陽家、兵家など諸子百家から影響を受けているという従来の指摘から類推できるだろう。

「黄老文献」が2100年前の前漢時代の墓地から突如、姿を現して40年、研究史が本格的に始まって30年。「黄老思想」という新たな光源から、現存の『黄帝内経』(『素問』『靈枢』)が編纂されたであろう前漢末～後漢までの遙かな道を照らし出す条件は、整ったと言えそうである。つまり、『黄帝内経』は、陰陽家、儒家、道家、墨家、兵家などの影響をばらばらに受けて成立したのではない。それら先秦諸子百家の思想を天人合一の「天道思想」を軸に編成替えをして作り出された統合思潮としての黄老思想を基盤として体系化されたのである。そう見ることで初めて、熊野論文の検討から浮上した儒家的な積極的、現世的な養生思想が恬淡無為の道家的な消極的脱俗思想と同居しているなどの矛盾が、矛盾としてではなく統一性として把握できるのである。

とはいえ、先を急ぐことはあるまい。中国ではもはや『黄帝内経』と黄老思想との脈絡を問う議論は珍しくないが、日本では、この連載の試みが本邦初公開なのだから、諸兄姉の今後の作業がやりやすいように、黄老思

想研究史を少し振り返っておこう。

#### ◇「六家要旨」の道家とは何か

前漢中期の武帝時代（BC141～BC87）に司馬遷が著した『史記』（BC91ごろ）には、漢初の宮廷を、黄帝の思想と老子の思想を結合した「黄帝老子之術」が席捲したと記載されている。景帝の母である竇太后は老子の書を好み、曹参、汲黯、田叔などの宰相が「黄老の言を学び、官を治め、民を理（おさ）めるに、清静を好む」とある。曹参は斉において黄老の学を学び、楽毅列伝には、彼に至る学統が、河上丈人→安期生→毛翁公→楽瑕公→楽巨公→蓋公→曹参と記されている。この流れは、斉の稷下の学と関係があるらしく、慎到、田駢、環淵ら、稷下の学者が「皆、黄老道德之術を学ぶ」という記述もある。また、老子韓非子列伝では申不害や韓非子などの法家を「黄老に本づき刑名をたつとぶ」とし、司馬遷の時代に、法家思想は黄老に由来すると考えていたことも分かる。

こうした『史記』の記録を踏まえ、斉の稷下の学に焦点を当てた早期の研究成果が、前にも触れた郭沫若「稷下の黄老学派の批判」（原著『十批判書』1945、日本語訳『中国古代の思想家たち（上）』岩波書店、1953）であった。しかし原史料はなく、史書中の断片的な記述から黄老思想の全体像を描くのは難しかった。数少ない手がかりの一つとして重視されたのが、司馬遷の父、司馬談が『史記』の太史公自序に残した「六家の要旨を論ずる」という、当時の思想界地図であった。そこには、道家の徒、司馬談の手で、「陰陽・儒・墨・名・法・道」六家の思想の長所、短所が要約され、道家が最もバランスが取れ国家統治に有用であるとされていた。少し長くなるが、重要なことなので、煩瑣な引用にお付き合い願いたい。

まず、陰陽・儒・墨・法・名が論じられる。

陰陽の術：陰陽・四時・八位・十二度・二十四節、それぞれが教えるところがあり、これに順う者は昌え、これに逆う者は死なずとも亡びるとするが、必ずしもそうではない。このように、人をこだわらせ恐れさせる。春は生じ、夏は長じ、秋は收め、冬は藏するのは天道の大いなる筋道であり、これに順わなければ、天下の綱紀はないとする。

儒者：博識であるが肝要な点は少なく、骨を折るわりには効果は少ない。

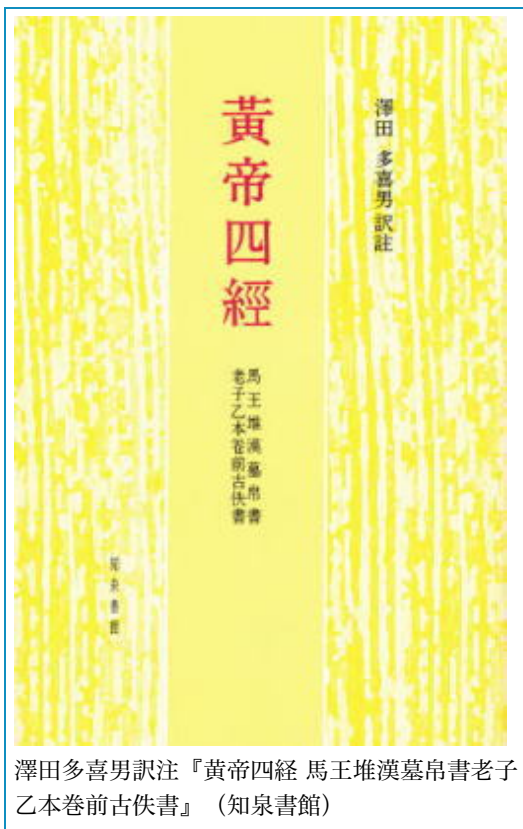
墨者：儉約を重んじすぎて順い難い。

法家：厳格で愛情に欠けている。

名家：詭弁は人を縛り、真実を見失なわせる。

最後に道家である。

「道家は人の精神を純一にし、行動は形なき究極者に合致し、それ自身で充ち足り万物にゆきわたる。その方法は、陰陽家の大順をうけつぎ、儒家と墨家の長所をとりいれ、名家・法家の要所をつかまえ、時勢によって移り、物に応じて変化して、習俗をたて政事をするのに、どれも適切でないものがない。儒者はそうではない。思うに、君主は天下のお手本である。君主が主張し臣下が合わせ、君主が先に立ち臣下が随うという状態では、君主が苦勞して臣下が怠ける。大いなる道の肝要なことは、貪欲を去り、聡明を排することであり、それらを捨てて政術（＝黄老の術）に任せることである。まことに、神は大いに用うれば竭（つ）き、形（＝肉体）は大いに勞すれば敝（やぶ）れる。形神を騒ぎ動かしながら、天地と共に長久なることを欲するなど、聞いたことがない」



「道家はなにもしないことをたてまえとする。それを「為さざるなし」ともいう。その実は行い易く、その言葉は解し難い。その術は虚無を根本とし、自ずから然るままに従うことを働きとする。決まった姿はなく、変らざる形がない。だから万物の情を究めることができる。物に先立たず、後れることもしない。だから万物の主となることができる。法を立てるか立てないかは、その時に応じての業である。基準を立てるのも、相手に応じて合わせる。人には天から与えられた神が生じ、それは形（＝肉体）に託されている。神大いに用れば竭き、形大いに勞すれば敝（やぶ）れ、形神が離れば死ぬ。死者は再び生き返ることはでき

ない。神が形を離れてしまうと再び帰ることはできない。だから聖人は形神を尊重する。このように考えれば、神は生の本であり、形は生の道具である。先ず神を定めずして、「我に天下を治める用意あり」などと言うのは、どんな根拠があつてのことか」（笠原祥士郎「前漢の道家思潮と嚴君平について」（北陸大学紀要第32号、2008を部分的に改訳）（注3）

#### ◇司馬談は黄老思想の特質を抽出していた

「道家」という命名は、太史公自序に初めて現れるが、一読して、司馬談のいう「道家」が、われわれのいう道家、すなわち老莊道家ではないことが明らかである。ここで混同すると、意味不明となるので要注意なのである。司馬談が最も優れた政治思想と宣伝し、実際に当時の宮廷で勢力を持った「道家」とは、陰陽家のいう天道思想を核とし、『老子』の無為自然の思想に順い、儒家、墨家の長所を採り、法家、名家の主張を取り入れ

た総合思想「黄老道家」だったのである。

この文章は、黄老思想の本質を過不足なく言い当てた見事な記述である。もう一度、上記の5つの要素を振り返ってみよう。まず、政治思想としての有効性を論じているので(1)に該当し、「天道思想」に着目している点で(2)に該当する。『老子』の無為自然に言及しているので(3)に当てはまり、(5)の複合思想の要素も満たしている。しかし、黄老思想とは何かを手探りしていた30年前、この文章の価値が十分認識されていたとはいえない。司馬談による「道家」概論に、わざわざ君主の「治身」の重要性が述べられている意味を察知できた学者はほとんどいなかった。つまり、(4)の「治身治国」論を含めて、司馬談は黄老道家の思想的特質を抽出していたのだが、学者たちの多くは素通りした。黄老思想をまだトータルに把握できていなかったのである。

しかし、それは今だから言えることである。そう言えるには、第1回で述べたように、1973年、長沙馬王堆の前漢墓から、『黄帝四経』と目される4文献が現れて、研究史が一挙に加速する必要があった。この年、墓中から、学術史に変更を迫るたくさんの帛書が見つかった。帛書は絹に書かれ、竹簡や木簡とは異なる形式の書物である。そこには、わたしたちに縁がある、循環しない11本の経脈が記載された『陰陽十一脈灸経』『足臂十一脈灸経』『導引図』『五十二病方』や房中書が含まれている。道家文献としては、現存の『老子』の直前の段階の帛書『老子』が出土し、その巻前に、4巻の無名の書物が付けられていた。それを、中国の研究者は、『経法』『十六経』『称』『道原』と名づけ、黄帝と臣下の問答があることなどを根拠に、漢代の目録書『漢書』芸文志に記載された『黄帝四経』だとしたのである。

芸文志は、後漢の学者、班固が前代の史料を引き写してまとめたものだが、そこに、『黄帝内経』を含む、「黄帝」をタイトルとする30近い書物の名前が掲載されていることは、すでに注目されていた。しかし、内容は不明であり、それが政治書だけでなく、天文書、暦書、占術書、兵書、医書、房中書、神仙書など多くのジャンルにまたがることも謎であった。その1冊、『黄帝四経』が、馬王堆漢墓の暗闇から2100年の眠りを破って忽然と出土したというのである。それが『黄帝四経』であることには、いまなお確証がない。しかし、その思いこみと断定が、その後の研究史を決定的に前進させたのであった。

(注1)「古の大道を明らかにする者は、先ず天を明らかにして道德これに次ぐ。道德已(すで)に明らかにして仁義これに次ぎ、仁義已に明らかにして分守これに次ぐ。分守已に明らかにして形名これに次ぎ、形名已に明らかにして因任これに次ぐ。因任已に明らかにして原省これに次ぎ、原省已に明らかにして是非これに次ぐ。是非已に明らかにして賞罰これに次ぎ、賞罰已に明らかにして愚知宜しきに処(お)り、貴賤位を履(ふ)み、仁賢不肖情に襲(よ)り、必ず其の能を分ち、必ず其の名に由る。此

れを以て上（かみ）に事（つか）え、此れを以て下（しも）を畜（やしな）い、此れを以て物を治め、此れを以て身を修めれば、知謀用いずとも、必ず其の天に帰す。此れをこれ太平と謂う。治の至りなり」

（注2）「（黄帝曰く）吾れ天地の精を取り、以て五穀をたすけ、以て民人を養わんと欲す。吾れまた陰陽をおさめて以て群生（＝あらゆる生きるもの）を遂げしめん（＝生をまっとうさせる）と欲す。之を為すこと奈何（いかん）」（在宥篇）

「雲将曰く、今、我れ願わくは六気の精を合して以て群生を育まん。之を為すこと奈何」（在宥篇）

「人、大いに喜ばんか、陽を破らん。大いに怒らんか、陰を破らん。陰陽ともに破るれば、四時（＝春夏秋冬）至らず、寒暑の和成らず、其れかえって人の形をそこなわんか」（在宥篇）

「上りて下らざればすなわち人をして善く怒らしめ、下りて上がらざればすなわち人をして善く忘れしむ。上らず下らず身に中たり心に当たればすなわち病をなす」（達生篇）

（注3）「道家は人をして精神専一ならしめ、動きて無形に合し、万物を贍足（せんそく＝充足）す。其の術たるや、陰陽の大順に因り、儒墨の善を採り、名、法の要を撮り、時とともに遷移し、物に応じて変化し、俗を立て事を施し、宜しからざる所なし。指約にして操り易く、事少くして功多し。儒者は則ち然らず。以為（おも）へらく、人主は天下の儀表なり。主倡（とな）えて臣和し、主先だちて臣隨う。此（かく）の如くなれば則ち主勞して臣逸す。大道の要に至りては、健羨（＝剛健、貪欲）を去り、聰明を細（しりぞ）く。此れを積（す）てて術に任ず。それ神は大いに用うれば則ち竭（つ）き、形は大いに勞すれば則ち敝（やぶ）る。形神騒動して、天地と長久なるを欲するは、聞く所にあらざるなり」

「道家は無為なり、又曰く為さざるなしと。其の実は行い易く、其の辞は知り難し。其の術は虚無を以て本を為し、因循を以て用と為す。成勢無く、常形無し、故に能く万物の情を究む。物の先と為らず、物の後と為らず、故に能く万物の主と為る。法有りて法無く、時に因りて業を為す。度有りて度無く、物に因りて興捨（きょうしゃ）す。（略）凡そ人に生じる所のものは神なり、託す所のものは形なり。神大いに用れば則ち竭き、形大いに勞すれば則ち敝れ、形神離れば則ち死す。死者は復た生きるべからず、離者は復た反るべからず。故に聖人は之れを重んず。是れに由りて之を觀れば、神は生の本なり。形は生の具なり。先ず其神を定めずして、「我、以て天下を治むる有り」と曰うは、何に由る哉」



★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

**HUMAN WORLD**  
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)  
[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.